
kontakuto

borokuso

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんたくと

【Nコード】

N3991V

【作者名】

ぼろくそ

【あらすじ】

まことに勝手ながら【書き直し】の為に掲載してあった分を【削除】しました。分かりやすく、読みやすくを目標に、順次再投稿していきますよう頑張ります。

ある日 お悩み相談部 にやってきた少女は言った。

「世界征服ってどうすればいいのでしょうか？」

その時はまだ知らなかった。その少女が本物の魔王だという事にはたして魔界とのファーストコンタクトの行方は？

ファーストコンタクト（前書き）

自分で読んでいても分かりにくいなどの問題点が多々あった為、書き直しを決定しました。

自分勝手に申し訳ありません。

ファーストコンタクト

それまでの人生は、彼にとっても一般的に見ても実に普通だった。また彼自身も普通だった。

何の異常もなく生まれ、育ち、望み、拒み、成功し、失敗し、恋愛し失恋もした。これといって特別な事もせず、何らかのフラグを立てたわけでもない。

しかし残念な事に彼はソコにいた。

計ったかのようにその年に生まれ、狙ったかのようにその町で育ち、仕組まれたかのようにその高校へ入り、決まっていたかのようにその部へ入部した。

そして何をしたでもなく出会った。会ってしまった。

あの日、何の前触れも無く始まった少女達との接触「コンタクトはるかやしる」を悠社は忘れな
いだろう。

何の変哲もないその町は何の前触れも無く静かすぎる月曜の朝を迎えた。

1年を通してさしたる大事件も無い城花町じょうかまちの住民達は、今日も平和で退屈な一日が始まると思っていた。

初夏の涼しげな空気の中で惰眠をむさぼる社も、例に漏れない住人

Aであった。BかもしれないしCかもしれないが、そこにさしたる意味は無く。とにかく平凡で健全な高校2年生である。

能力も特筆すべき物は無く、性格は温厚で草食系。世話好きとまでは言わないが、困った友人を放っておけず、頼られると断れない。

少々難儀な性格ではあるが人に迷惑をかける事を嫌い、思いもよらぬ行動力をみせる事もある。——と、以前ある後輩にプロファイリングされた事もある。

貴重な土日进行を跨いで行われた 城彫川および中央通り沿い・駅前・商店街・むしろ町内全部掃除しようぜ活動 というやたら名前の長いボランティア活動に参加させられた経緯もあり、目覚まし一つでは足りないほど熟睡していた。

が、社はおるか住民の誰もが、始めて経験する激しい轟音によって眼を覚まされた。

突然の事に慌てながら飛び起き、既に起きていた者達と共に空を見上げた彼らは、その光景を見て一様に目を疑った。

城が空を飛んでいた。

特撮やSF映画のような機械的・近未来的なメタリックな造形ではなく、巨大な岩の上に大理石で造られた城塞は、物理法則を完全に無視して悠々と町の上に浮かんでいた。

その子供の頃に憧れたようなファンタスティックな光景に、誰もが息をのみながら驚嘆し、感動した。しかし、それも束の間に彼らは現実に直面した。

自分達の頭上に浮かぶ城へと向かう二機の戦闘機が現れたのだ。

自国の物とも他国の物とも分からない武装兵器の登場に、傍観していた住民達は一斉にうろたえてざわめき立った。

控え目にも友好的とは思えない戦闘用飛行機は、城の周りを警戒するように高速で旋回し、一度離れたかと思えば突貫するかのようになり、城の更に頭上から降下した。

住民達は見た。自分達を叩き起こした轟音の正体である戦闘機が、城に向かって両翼からミサイルを発射するのを。

二発づつ、計四撃ち出されたミサイルは、空飛ぶ城塞を落とすべく白煙を上げて直進した。

その瞬間、多くの住民は死の恐怖を持った。ミサイルの威力がどうこうなどという知識を有している物などいない。しかしそれでも多くの者は恐怖した。空に浮かぶ城塞が町へと落下する光景に。

しかし、結果として特に何ともなかった。

撃ちだされたミサイルは目標に着弾する事は無く、かといって行き場を失って地上に落ちてくる事も無く。数条の光線——所謂光学兵器によって迎撃された。それを見た二機の戦闘機は即座に機首を返して去っていった。

僅か5分足らずの出来事である。

なんとも非常識で非日常的な出来事だった。ちなみに非常識は戦闘

機の方にもあてはまる。

と、悠然と上空に佇んでいた城に変化があった。

変化——といっても魔人形態に変形したり、魔物の大群が飛び出したり、巨大な砲門が現れて人をゴミのように吹き飛ばしたりといった外見的要因では無い。

最初に聞こえたのは『キュウウーンザザア』というラジオをチューニングする時の耳障りな音だった。続いて『ピンポンパンポーン』という間の抜けた呼び出し音。そしてそれより更に間の抜けた幼い声が届いた。

『えー、このたびは大変ご迷惑をおかけして誠に申し訳ございませんでした』

いきなり謝罪から始まった放送に半分近い住民がその場でズッコケた。残りの半分はといえばどうリアクションしていいのか分からずに目をパチクリしているのが大半だ。

しかし、この間の抜けた放送のおかげで住民の不安はある程度やわらいだ。

どうやら非常識な存在ではないらしい。先程のビームは自衛の為のものであって自分達に向けられる事は無い。……咽が乾いたし何か飲もう。

ホッと息をつく住民達は続いて飛び出した言葉に耳を疑った。

『突然で申し訳ありませんが、世界征服の為の第一歩としてこの町

を占拠します』

あちこちでコップが割れる音が響いたが誰も気にかけない。

『捕虜の待遇については後ほど連絡いたしますので、しばらくは通常の生活を続けてください。間違っても町から出ないようお願いします。以上、魔界魔王軍総司令、御倣麻緒みならいまおがお送りしました』

知らない間に町ごと占領されていたらしい。言葉にもならない驚きが一斉に広まり、パニックを通り越して電池が切れたように住民達は固まった。

——ザワザワ

「あれ動力炉は何エンジンなんだろうな」

「きつと石よ。光る石」

「私の戸籍名古屋なんだけど出てったらダメかしら？」

「魔界って言ってたけどあれマジだと思う？日本語喋ってたよ」

「声的に女の子っぽかったよな。幼い感じの」

「悪魔っ娘キタ。悪魔幼女さらに歓迎。尋問とかされたいです」

——ザワザワ

現実逃避するかのような会話がどこかしこで行われている。

一般的な住民Aである社も当然心境は同じである。二階の自室から身乗り出し、これこれ10分は固まっていた。

いくら目の前にこれでもかと存在感を放たれても心が認識したくないと騒いでいる。

大きく溜息をついてベツトに倒れ込み、現実逃避するように、そして何か違和感を感じてふと眼を閉じた。

——週末の事である。

「世界征服ってどうすればいいのでしょうか？」

城彩高校 お悩み相談部 の面々は初めて出会う異様な質問に一斉に動きを止めた。

お淑やかで幼い雰囲気その少女はからかっているようには見えず、変な電波が流れているようにも思えない。非常に対応に困る来客者であるが、この場にいる面々もまた面々である。

素早く頭を切り替えて話を聞く体制を整える者もいれば、マイペー
スに読書を再開したり手元の手帳に少女のスリーサイズ（目算）を
書き込む者もいる。

ポカンと固まっていた社も早々に復活して業務日誌を出して記入の
構えをとった。

「あつ、とりあえず座って」

最初に口を開いたのは部長である3年の伏見千施ふしみ ちせだった。

年長者だけあつてか、世話好きでノリが良い性格故か、少女が恐る恐る座る頃にはすっかりいつもの落ち着きを取り戻していた。

「ごめんねちよつと驚いちゃって。私、三年の伏見千施」

「い、一年の御倣麻緒です。よろしくおねがいします」

「よろしく。えーっと、世界征服……って、言葉通りの意味でいいのかな？」

優しいような笑顔で問いかける千施に麻緒はコクコクと頷いた。

「そうなんです。実家の都合でどうしてもやらないといけないんです！」

まともに受け取ってくれた事が嬉しかったのか、頬を上気させて興奮している。初見のお淑やかそうだった雰囲気は吹き飛び、代わりに小動物の様な愛らしさがあふれた。

そんな麻緒を社は改めて見た。

パツと見の印象もそうだったが、改めて見ても麻緒の容姿は幼く、背も低いので見つめると自然とあごを引いてしまう。制服でなかったら中学生にしか見えないだろう。

女子高生としては長身の千施と並ぶと一回り近く年が離れて見える。
……などと考えていると不意に話を振られた。

「社君はどう思う？」

「え」

つい面倒くさそうな声を上げてしまう。

「え、じゃないよ。麻緒ちゃん真剣なんだから」

たとえ珍妙奇天烈で不可能な相談でも、真剣生真面目に取り組むのが信条の相談部の部長だけあって、千施は実に真剣だ。そうになると社も真面目にやらざるを得ない。

「世界征服ってくらいなんだから、占領して自分の領土にすればいいんですよ」

「なるほど！」

社の言葉に麻緒は手をポンと叩いてメモを取り始めた。……あれ？

「まあ、金とか権力で逆らえなくするのもアリですけど」

「なんとお！」

ペンをとり落として驚く麻緒に社は頭を抱えた。

いったいこの少女はどこでつまづいていたのだろう。スタートラインにすら立てていなかったのではなからうか？

そんな事を考えながら、社は千施に困った顔を向ける。仕方ないと、マイペースにサボっている部員達へ千施は声をかけた。

「あなた達も何か意見を出してくれないかな」

不真面目部員達——といっても幽霊ばかりのこの部で顔を出しているだけでも真面目な部類ではあるが——はその声にそれぞれ動かしていた手を止めて顔を上げた。

まず口を開いたのは麻緒と同じ一年の白衣賢華^{しらい けんか}だった。読んでいた本をしまつて麻緒に目を向ける。

「一つ確認がありますが、それほど大きな目標を持つならば当然資金や物資の所有ないしそれを提供する後ろ盾が存在すると考えてよろしいでしょうか？」

クールビューティを地で行く鋭い視線に射抜かれて驚きながら麻緒は「は、はい」と頷いた。慌てて千施が間に入る。

「カシコ目が怖いよ」

「別に普通かと」

カシコと言うのは千施が付けた賢華のあだ名であり、由来はまんま博識で頭が良いからだ。本人が嫌がらないので部内では完全に定着し、校内でも広まりつつある。

怯える麻緒を撫でる千施にかまわず賢華は麻緒から視線を外さない。本人の言うように視線が鋭いのは賢華の特徴の一つだ。しかし今日

はそれが一段と鋭い。まるで睨んでいるようだ。

「私の意見ですが、ある程度の軍事力があるのならそれを悟られる前に行動を起こす事が重要だと思われます」

「……と言いますと？」

「重要施設の破壊・要人の暗殺・敵戦力の分断です」

「怖えよ」

社は思わずつつこんだ。千施も「もう少し女の子らしくね」とたしなめるように肩を叩いた。

しかし賢華の言葉は終わらない。

「では強力な兵器を製造して脅すのはいかがでしょう？紳士な対応をすれば無条件降伏も可能と思われます」

「……まあ、さっきのよりはましかな」

ましなだけで無表情で語る賢華は実に恐ろしい。それに賢華の言葉に慣れた自分達も自分達だと社は思った。

美人でクールで物騒な少女。それがお悩み相談部での賢華のイメージであった。

そんな賢華に触発されてか、気付けば部員達による一大厨二病大会が始まっていた。

「やっぱ戦艦だろ巨大戦艦。変形してロボットになるやつ」

「馬鹿野郎。世界征服と言えば改造人間だろう」

「思いきってファンタジー路線いこうぜ。怪獣とか」

「リアルな話、細菌兵器」

相談者無視で盛り上がる部員達に社は呆れ、賢華は本に目を戻し、麻緒は困ったようにオロオロと視線を彷徨わせた。

そんな部員達に青筋を立てて千施は立ち上がった。顔は笑顔のまま、しかし後ろには甲冑を纏った狂戦士が見える。いち早く気付いた社は麻緒を連れて壁際へと離れ、賢華も流れるような動作で本を読んだままその隣に移動する。

キレる。そう思った瞬間、しかし千施とは違う男の声がその場を静めた。

「——ている」

「え？」

「重要な事を忘れているぞお前達」

静かに、しかし圧倒的な存在感を持って、一人の少年が立ちあがった。社と同じ二年の修道聖路だ。百人が百人振り返るだろう端正な顔を歪め、髪を振り乱しながら彼は叫んだ。

「……そう、捕虜の扱いだ」

その言葉に全員が無言で聖路を見た。疑問は無い。この男なら言うであろうと誰もが思っていた事だ。

ちなみに賢華と千施を除く女子部員達は最初の一言の時点で全員逃げ出している。

「敗者にとって勝者は絶対。力によって屈服されようともそれを受け入れるしかないのが現実だ。例えばエリート女士官、医療部隊の看護婦、レジスタンスの少女……。普段なら蔑まれ軽蔑される行為も戦場では平常。何故なら戦場は綺麗事など通用しない、野獣の世界なのだから！」

その言葉に男達は一斉に拳を握った。

何故気付かなかったのだろう。何故閉じ込めていたのだろう。自分達の中のケダモノを。

放つ場所はそこにある。何故なら戦場では野獣こそが種の頂点なのだから。

後光がさす聖路を中心に男達は一斉に雄叫びを、

「いいかげんにしろお！！」

上げなかった。

野獣よりなお恐ろしい狂戦士バーサーカーの乱入によって男達は一斉に部室を後にして逃走した。約一名、感慨と妄想にふける聖路を除いて。

「アホだ」

正確には変態である。静かにしていると思えば唐突に暴走する馬鹿。社にとっては近づきたくないタイプだが、悲しい事にこの一年で友人関係が築かれてしまっている。別に社が変態の側なわけではなく、静かにしている分には害は無いのだ。

と、黙って読書を再開していた賢華が口を開いた。

「しかし捕虜の扱いというのは確かに重要とされます」

「そうなのか？」

嫌な予感がすると思いつつ社は聞き返す。

「有限の物資を当てるのですから、配給は生きるのに最低限……労働に当てるのならば、それを考慮した最低限にとどめなければいけません。与えすぎれば物資の消耗が早まり、脱走や暴動に必要な体力を与えてしまう。しかし大量に餓死者を出せば死体の処理や疫病の可能性も――」

「その辺で勘弁してやってくれ。こいつには刺激が強すぎる」

顔を真っ青にして震えている麻緒を見て賢華は言葉を止めた。

「すみません」

素直に謝る辺りこの少女には悪意は無いのだ。そこが一番厄介でないのだが。

気付けば聖路までどこかへ行つて部室には3人だけ——千施は逃げた男子達を制裁に行つた——が取り残されていた。

ついていけず目パチクリとさせている麻緒に社は向き直つた。

「悪いな何か中断して」

「いえ、真面目に聞いていただいてありがとうございました」

心底嬉しそうな声を上げて麻緒は頭を下げた。つい照れくさくなつて社の目が逸れる。

「逆に聞くが一つでも参考になつたか？」

「はい。大変参考になりました。これだけアイディアが揃えば大丈夫です」

何を持って大丈夫なのかは不明だが、本人がそう言うのなら大丈夫なのだろうと社はそれ以上言わなかった。

よほど満足したのか、笑顔で——しかも何故か途中で振り返つて手を振つて——去つて言つた廊下をしばらく社は眺めていた。不思議と頭がぼんやりして身体が動かない。振り返つたら忘れてしまふような錯覚すらしてしまう。それほどに唐突に現れては頭が追いつかない間に帰つてしまったのだ。あの少女は。

ひよつとして夢でも見ていたのだろうか？振り返つたらいつも通りの部室で目が覚めるかもしれない。……などと考えていると夢心地を切り捨てるような冷めた声が届いた。

「危険、と判断します」

「は？」

思わずボケた声を上げて振り向く社の目に至近距離で鋭い目をみせる賢華の姿が映った。

驚いて後ずさる社にかまわず、極めて事務的な口調で賢華は言った。

「御倣麻緒という生徒はこの学校に存在しません。……何かあつても関わらない方があなたの為です」

「カシコ、さん？」

「明日明後日の活動は私用で出られませんので部長に伝えておいてください」

それだけ言つてペコリと頭を下げると賢華は部室を後にした。

残された社はしばらく動けずにそれを見送った。

それと気付かぬまま、魔王とのファーストコンタクトは幕を閉じた。

——そこまで思い出し、結果的に賢華の忠告は正解だったと思った。しかし残念ながら気付いた所で遅すぎる。この状況下で関わらない方が難しい。

時計の針は何時の間にか横一文字を通り越してV字を描き始めている。とうに学校の始まる時間を過ぎているが、こんな時に授業も何もないだろうと社は自宅待機を決めた。

それは住民達も同じであり、仕事などする場合ではなく。当然、例によって住民Aである社もまた同様に暇を持て余していた。

のろのろと起き上がり、リビングへ降りてテレビをつけると、画面にはパパラッチされたアイドルの写真が大きく映し出されていた。何度チャンネルを変えても、何時まで経ってもこの町の事が流れる事は無かった。

ソファアの上で横になり、意味も無く頭を動かす。繰り返すようだが暇なのだ。

頭の上で巨大な城が町内制圧宣言をした所ですぐに何かをされるわけでもなく、しなければならぬ訳でもなく、する気も起きないのてこうしてテレビを見るくらいしかない。

お人好しを自覚する社だったが、魔界からの侵略者などという荒唐無稽なものから町を取り返すなど考えもしない。

ちなみに両親は昨日から知り合いの結婚式で遠出しており家にはいない。居た所で学校に行けと言うとも思えないが。

不意に机の上に置いていた携帯電話が音を出して光った。

画面を見て表示された名前に一瞬顔をしかめ、しかしあきらめたようにすぐに出た。

こうして、社にとって長い一週間となる一日目が始まった。

『ファーストコンタクト 終』

『次回 お悩み相談部』

ファーストコンタクト（後書き）

改修開始です。

読みにくいなど意見があつたらそのつど再改修、再再改修していきますので感想の程をお願いします。

お悩み相談部

不意に鳴りだした電子音で社の思考は引き戻された。机の上でネオンのように点滅する携帯を掴んで画面を見る。

バーサーカー
伏見千施と表示されていた。

失礼な当て字だが部内では割と公用語のように使われていたりする。自分からして賢華をカシコなどと名付けているのだから反論などさせはしない。

……何か出たくない。

そう思いながら、出ないと後が怖いと思い、通話ボタンを押した。

『おつ、ちゃんと出たね。おはよう社君』

出ないと乗り込んでくる癖に。……と口に出さず内心で悪態をつきながらも、表面上は穏やかに社は対応を開始した。

「何か大変な事になりましたね」

『うん、その事で話があつてね』

「……」

予想通り早くも嫌な予感が当たってしまった。

せめて前置きくらい置いてほしいと思うが、その真っ直ぐでさっぱ

りとした性格が彼女のいいところでもある。

元々孤立しがちだった社と部員達との間を取り持ってくれたのも当時副部長だった千施であった。まあ、それ以降完全に頭が上がりなくなり、実質いいパシリにされている感を社も感じていないのではないのだが。

もつとも、それを差し引いても伏見千施を放っておく事は社には出来ない。

困った人間がいれば軍隊に単騎特攻も辞さない女。伏見千施とはそういう人間なのだ。

しかも今回は思いっきり自身が関わっている。出張らない方がおかしい。そんな事は分かりきっていた。

『今から学校に集合ね。みんなにも声かけたから』

「念のために言っときますけど、俺らじゃどうにもならない事って世界には山ほどあるんですよ」

という至極真つ当な社の意見は、素敵な笑顔（予想）とともに却下された。

『大丈夫。私達は伝統のお悩み相談部なんだから』

そこにどんな自信を持てと言うのか、しかし本人はかなり本気だ。

『じゃ、待ってるから。頼りにしてるよ』

そう言われて通話は切れた。

待っている。頼りにしている。……そう言われてしまうと悠社は断れない。

分かってて言っているのか、無自覚に本音を言っているのかは分からないが、それに応えてしまう程度には悠社はいいい人間なのだ。そう、本人は思っている。

社の予想に反して結構な数の生徒が登校していた。

どこかしこで大人達が揃いも揃って集まり寄り会って相談会を開いている為、結果的に子供達が家に取り残される事態が発生してしまったのが原因だ。

当然子供達も一人は不安であり、多数の人間と話さないし行動を共にしてきたいので、学校という共通の集合場所に集まっているのだ。皆一様に窓から自分達の町を見降ろす城を眺めて話し込んでいる。

社の姿を見て、普段話さないようなクラスメイトまでが混ざらないかと誘ってきたが、社はやんわりと断って部室へ急いだ。

社が入ると相談部員——の中の真面目な部類——20人程が既に集まっていた。社を見て一斉に頭を下げてあいさつした。

別に社が副部長であつたり、影の？2だつたりするわけではない。

しかし、何度か暴走した千施を押さえる事が出来た功績と、話しかけ辛い賢華と気軽に話せる事に一目置かれる存在となっている。本人は非常に不本意であるが。

生真面目に一人一人挨拶を返しながら、社は開いている席に座った。

千施はまだ来ていないらしい。見れば賢華の姿も無い。

「社さん知ってます？」

隣に座っていた後輩が社に話しかけた。

「何を？」

「大通り通行止めになってるらしいんです」

「橋も封鎖されたって父さん言っていました」

「俺も聞いた。町から出る道全部外から塞がれてるって」

「自衛隊来てるらしいよ。戦車見えたもん」

近くにいた部員達までが次々に口を開いた。慣れた事なので、驚きながらも社は冷静に情報を整理する。

「つまり町からは出られない。出た人間もいないって事か」

「それと町の外とだけ連絡がとれないんですよ。メールも電話も」

「外と、だけ？」

「はい。町の中の奴とは普通に繋がるんです。不思議な話ですよ」

「不思議というか異常だろ」

電話もメールも中継所を通じて相手に送られる物だ。この町にそんな施設が存在するなど社は聞いた事が無い。いや、あっても無理だ。コメカミを揉むように押さえ、考えるだけ無駄とばかりに社は溜息をついた。

「他に何か変な事ってあるか？」

「他にですか？」

問われた後輩は考えるように頬に指を当て、「ああ！」と声を上げた。

「変な外国人に会いました」

「外国人？」

「はい。アメリカのドラマに出てくるみたいなイケメンでした」

……だからどうした。

そう言おうとした社の言葉は、しかし別の声にかき消された。

「俺も見た。ハイとかイエースとか言ってた」

「私も見ましたブロンドの超美人」

気付けば話題は完全に謎の外国人達へと変わっている。

話しに入る気になれない社は、一人で窓から見える城を見た。町のほぼ中心で止まった城は威圧するように停滞し、朝以降何の音沙汰もない為非常に不気味だ。

と、そこへ遅れながら賢華を伴った千施が現れた。

「お待ちせみんな」

元氣にあいさつをする千施の隣で賢華は小さく頭を下げた。その手には何枚かのプリントの束が握られている。

また何か調べものでもさせられたなと社は同情した。肉体労働にこそ使われるのが社なら、頭脳労働に使われるのが賢華なのだ。

「さっそく会議を始めようか」

そんな社の内心など知らず、千施はホワイトボードの前に立って千施は言った。

ちなみにこの部室、元は多目的室として使われており、20人がゆうに入る事から分かるように無駄に広い。さらに部の歴史も長い為ホワイトボードを始めロッカーや給湯設備など大抵の物がそろっている。

「議題はすばり、今私達が何をすべきか！」

作文のタイトルのような曖昧な議題だが、その意味する所を分らない部員たちではない。何度も付き合わされた経験が頭をよぎる。先陣を切るのはいつも社だ。

「ちょっと待った。毎回のように説明無しで始めるの、今回ばかりは黙ってられません」

が、それをものの見事に流されてスルーされるのも毎度のことだ。

「うん、今説明するね。カシコ、GO！」

ビッシツと人差し指を突き出しての号令とともに、賢華は数枚のプリントを持ってホワイトボードの前に立った。

「現在城花町の周囲は自衛隊を含む部隊によって包囲されていると思います」

そう言って張り出されたのは、町一帯を拡大コピーされた地図だった。

歪な円の形をした城花町は三つの市と町に囲まれており、そのちょうど境界の大半を川や線路・駅などがきれいに通っている。

キュポン——という音をたて、賢華は赤いキャップのマジックのふたを開けた。

「町の境界の半分を占める城彫川は各橋の出入口に武装した部隊が駐留して封鎖・監視を」

報告しながら器用に油性インクで河川を赤く染めていく。

「同様に駅構内も閉鎖済み。川岸一帯と線路沿いにはフェンスが何重にも張り巡らせて侵入不可能。交通機関も道路はおるか、路地裏や私有地に至るまで車両とフェンスで完全に目張りされて、一部の隙間もあります。地下の水道については不明ですが、期待しない方がいいと思われます」

どこから集めたのか、普通なら知りえる筈の無い情報の嵐を賢華は一気にまくしたてた。

町は完全に赤インクで囲まれている。

「ちなみに電車は平常運転していますが、駅は素通りしているようですので飛び乗るのはお勧めしません」

最後に小粋なジョークを交えて賢華の報告は終わった。

深いため息が千施の口からもれる。

「敵はあの子だけじゃないのね」

「完全に見捨てられてますよね。俺ら疫病扱いですよこれ」

「解決したら賠償金でもせしめて上げようか。で、肝心のあの城については？」

千施の問いに賢華は首を左右に振った。

「不明です。もうしわけありません」

「いいよ。気にしないで」

そんな賢華に、千施はポンポンと小気味よく肩を叩き、右手を握って親指をピンと立てた。

「十分役立ったよ。グッジョブ、カシコ」

表裏の無い無邪気な笑顔に、賢華も年相応——とまではいかないが照れたように「どうも……」とだけ応えた。

実際、半日と経たずにここまで情報を集められる高校生など賢華くらいだろう。分かっているのかわからないのか、それをグッジョブの一言で済ませる千施も大物である。

さて、そんな賢華の説明を黙って聞いていた部員たちでは当然ない。繰り返すが、散々巻き込まれてきた被害者達なのだ。

一斉に顔を見合わせ、何かを確認するように頷き合う。既に意思は固まっているようだ。

全員が確固たる意志を持ち、暴走目前の独走状態の千施を止めるべく……一斉に社を見た。

何かを訴えるような強烈な視線に、たらりと汗が額を流れる。

実に分かりやすい他人任せである。が、悲しいかなこれがもつとも確率の高い方法である。それを分かっている社も社、理不尽さを感じながらも慣れた仕草でそれを隠し、毅然とした態度で立ち上がった。

「言いたい事は分かります。気持ちもわかります。ここにいる全員が痛いほど分かってます」

隣で後輩Aが熱い視線を投げかけているのも気付かず社は弁を振るう。

「でも俺達は学生です。防衛組織に属している訳でも無い、変身も出来ない、ロボットも戦闘機も持っていない。あるのは頑張った時のバイト代程度の部費と、無駄に最新鋭のAV機器、そして町内限定の不確定な情報網」

「OB会」

「……忘れちゃいけない先輩方のバックアップ。それだって頼りに」
「なる」

「なったこともありましたが」

徐々に劣勢になる社に、しかし背後の視線は増す。視線だけ。

泣きたくなる状況だが、毎度の事なので社はまだまだくじけない。
一人だけ憐れむような視線を向ける賢華の姿もいつものことだ。

「それにしたって俺達が行動を起こす必要は無いんです。待っていれば助けが来るかもしれない。こっちから外に連絡を取る手段も見つかるかもしれない」

「残念ですがそれは期待しない方がよろしかと思われます」

「え」

てつきり静観を決め込むと思っていた賢華が唐突に口を開いた。

「推測ですが現在この町一帯の通信網は通常とは異なる回線……別次元のネットワークと言える物に支配されています。例えば世界最高のスーパーコンピューターがあつたとしても介入は不可能と思われます」

「そうなんだ」

「さらにお気付きと思いますが、外では完全すぎる情報統制がなされています。その一番の原因となっているのが何故か町の外からは城の存在が確認出来ないからです。光学機器も肉眼さえも」

「……………」

「最後の手段として、町の外周を取り囲んでいる軍隊へ走って行って助けを求めるといふ選択肢もあります」

「……無理なのか？」

無理なんだな。無理なんだろう。

内心で見事なシンクロをみせる部員達の疑問に、これまた見事なまでの無表情で賢華は頷いて見せた。

「日本語が通じる相手と出会えばまだ可能性はありますが」

その言葉に社以下の部員達は首を傾げる。

自衛隊なのだから全員日本人ではないのだろうか？

「確かに自衛隊を含んでいます。が、その99%はEU（欧州連合）を中心とした多国籍軍と思われます」

「——は？」

今度こそ社は言葉を失った。

仮に米軍だったならば話しは分かる。沖縄を中心として日本には100を超える基地が存在しているのだから来たとしても不思議ではない。

しかし何の縁も無いヨーロッパの軍隊が町を包囲しているなど理解が追いつかない。

いや、そもそも——

「何でそんな事お前が」

「聞かない方がよろしいかと思われます」

間髪入れずに答えられた言葉に、一瞬うすら寒い物を感じ、社は口をつぐんだ。

部員達も一斉に固まり、中にはブルブルと震えている者までいる。

そんな中で何事も無く元気なのは千施だけだ。「カシコは優秀だね」

と頭を撫でて実に大物である。

時計は間もなくキレイなレの字を描こうとしていた。

○ ● ○ ○ ● ○ ○ ● ○ ○ ● ○ ○ ●

複雑に絡み合った歯車が正確に時を刻むのを一人の少女が眺めていた。

小動物を思わせる幼い容姿に、なんとも似つかわしくない 魔王軍総司令 という肩書きを持つその少女こそ、事を中心人物である御倣麻緒である。

一目で高級と分かる調度品と地上数百メートルの絶景を前にしながらかれこれ2時間はそうしている。

別段彼女に歯車やゼンマイに対する関心があるというわけでは無い。単純にそれ以外に興味が失せてしまっているからだ。

それも当然。なにせこの部屋——ひいては城の内装そのものが彼女が生まれてから十数年 配置 されていた場所をそのままコピーされた場所なのだ。

出生に伴う事情によって外出もままならずに過して来た彼女にとっては木目の数まで知り尽くした場所であり、柱の傷から床の軋みまで再現された新居という名の旧居は窓の無い監獄に等しかった。

いや、窓が無いならば窓にへばりついて額を赤くすることも無かつ

ただろう。

思い出すのはつい先日、に敵地視察の名目で何とか説き伏せて町へ降りた時の事ばかりだ。

即席で作った制服も、話でしか聞いた事の無い学校も、何より突然現れた自分の悩みを親身になって聞いてくれた相談部の事が否応無くフラッシュバックしてしまう。

そんなわけでもって、この二日間。窓の外を見る事も無く、努めて何も考えないように過してきたせいか、半ば悟りを開きそんな場所にまで麻緒は立っていた。

と、不意をつくように部屋のドアが四度ノックされた。

しかし驚きもせずに麻緒は対応する。気品ある足取りでゆっくりとドアを開ける。

「どうかなさいましたか？」

「お時間となりました姫様」

凜とした女性の声に、麻緒は小さく驚いた声を上げた。

「もうそんなお時間ですか」

時計を眺めていてそんなセリフを言うあたり、結構きているのかもしれない。

しかしそんな事など知りもしない女性は、気品に満ちたその立ち振

る舞いに、ほんのりと頬を赤く染めている。

——中庭の翼獣系魔物を洗脳して降りれば……。

などと、若干死んだ目で考えている事に気付く事も無く。

●○○●○○●○○●○○●○○

さて、創部並びに学園始まって以来を通り越して人類史に残る歴史的瞬間に立ち合う事となった相談部の面々であったが、事の重大さ故にいまいちピンとこないのか、はたまた無意識に現実逃避をしているのか、なんとも緊張感の無い会議が続いていた。

そもそも、会議とは言っても千施が提案して社がそれを否定するという事の繰り返しであったが。

ブツクリと頬をふくらませ、大人びいた見た目に似合わぬ子供の様な反論までしてくる千施であったが、そこは慣れた態度の社にやり込められた。

若干オヤジ臭い動作で7杯目になる紅茶を飲み干し、不機嫌ですとばかりに長身に見合う胸を揺らして社を睨む。

数名ほど別の意味で生唾を飲む男子もいたが、そこは空気と呼んで気付かれないよう自重する。——いや、約一名堂々と携帯を取り出す変態もいたが、そこは相談部暗黙のルールである。

ピリピリとした空気が部室に流れる。が、その発生源だった千施が

不意にそつぽを向いた。

あきらめてすねたように見えるが、部長として無理だと判断したのだ。そういった判断が出来る辺りが、彼女を部長たらしめている長所である。

クルリと首を回転させ、「じゃ」とトーンの下がった声を出す。

「せめてあの子の出方だけでも見よう。それならいいよね？」

反対意見は起こらなかった。社からも。

むしろそれは彼らの知りたい所でもある。

異論が無い事を賛成していると判断し、千施は言った。

「カシコ、アイディア」

これでもかというほどに他人任せな言葉だが、それに応えられるのが賢華の凄い所である。

「作戦を決めているのが御倣麻緒であるのなら予想を立てるのは可能かと」

「本当!？」

驚く千施に賢華は頷く。

「先日かの魔王がこの部室を訪れた際、社先輩が業務日誌に何か書き込んでいたと記憶していますが」

言われて始めて社は思い出した。習慣的に書いている為、内容はおろか書いていた事すら曖昧なのだ。

慌てて取りだしたそれを開き、しかし目的のページをめくる前に手を止めた。

「何か見てはいけない気がする」

「見なくても変わらないと思います」

周りに詰めかけて覗き込んでいる部員達も一斉に頷く。

「それもそうか」

意を決して社はページをめくった。

『世界征服のやりかた』とタイトルされた下に、箇条書きのように部員達の意見が書かれている。

『1、派手な登場。目立つ基地などがあれば良』

これは既に行われている。

『2、前線となる領土を手に入れる。労働力となる領民も』

これも完了済みた。今まさに社達自身がそれである。

『3、全世界首都同時攻略』

いきなり何段階か飛んだ。あきらかに順番が間違っている。

さすがに常識的に無いだろうと無視して次へ進む。

『4、危険分子の排除。領民の武装解除』

「まあ、順当にやるとしたらこれだな。でもこの町に武器なんて無いよな？」

誰にもなくなげかけた問いに応えたのはやはり賢華だった。

「警察なら該当する要素があるのでは？」

「なるほど」

ポンと手を叩く。が、ふと気付いて再び問いかけた。

「この町って警察署無いよな？」

「そのはずですが」

「交番ならすぐそこにあるぜ？」

部員の一人が窓の外を指さした。

お世辞にも広いとは言えない半円柱型の建物が通りの向こうに見える。町に3つしかない交番の一つだ。

入口に飾られたマスコットキャラクターのピーパー太キョンと番犬城花丸を中心に、親しみやすい地域密着型の交番を目指し

て設計されている。

「いや、無いだろ」

真つ当な社の言葉に全員が頷いた。一昔前のアメリカではあるまいし、日本の警察官が持っている武器など警棒かサスマタくらいなものだ。

次のページをめくろうとし、しかしその手は不意に聞こえた音によって止まった。

『ピンポンパンポーン』という朝方ぶりの間の抜けた音に住民達があわてて天を仰ぐ。

『皆さまお忙しい中をお時間いただきありがとうございます。御倣麻緒です』

住民の反応などお構い無しの和やかな口調で麻緒は言う。

『急な話ではありますが、この町における治安と統治の安定化の為に皆様の行動を制限する準備が整いましたので報告させていただきます』

と言われて理解できる人間がいるわけも無く、もれなく？マークを浮かべて天を仰いだ。

不意にその目が細まる。

城の底にあたる部分から強力な光が発せられ、何が起こったか考える間もなく――光が降り注いだ。

『まず最初に、武装解除の一環として警察組織の施設を破壊させていただきました』

社達の目の前で、ついさっきまでそこにあつた交番が跡形も無く消滅した。

『お悩み相談部 終』

『次回 魔王の娘』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3991v/>

こんたくと

2011年11月13日15時01分発行